

術・資材などの
けします。

野菜



抑制力ポチャ栽培



野菜

平田 優輝
下島宮農指導センター
080-1729-1639

作型	8月			9月			10月			11月		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
	○	←	○	○	←	○	○	←	○	○	←	○
	播種			定植			誘引・交配・薬散			収穫		

1、品種…くりゆたか

2、圃場準備…排水対策を徹底し、畦幅は3～4mの高畦ベットを作る。施肥量(kg)

10a当り	N	P	K
基肥	12～15	20～25	12～15
追肥	3	3	3
合計	15～18	23～28	15～18

3、播種…8月上旬～中旬に直播又は、セルトレー・ポットに播種する。

播種量は10a当り1本仕立て1000粒、2本仕立て500粒必要。

4、定植…1本仕立ては株間30cm、2本仕立ては株間70cmで、植穴処理を行い定植。活着するまでは灌水する。

5、整枝…一本仕立て

主枝が60cm位伸びた頃わき芽を除き、風等で動かないように主枝を等間隔に杭や棒等で真直ぐ固定する。着果

位置は、9～12節程度で、株元から70～100cmの長さに着果させる。

二本仕立て

本葉が4～6枚残し摘芯する。子づるが15～20cmほど伸長したら、良好なつるを2本残し他はかぎとる。後の管理は1本仕立てに準ずる。

6、交配…9月上旬～下旬にミツバチ等や雄花を利用した人工交配により必ず着果させる。

7、追肥…着果確認後にソフトボール大の大きさになった頃、速効性肥料を施用する。中耕と除草を兼ねて蔓が1mほど伸びた時に待ち肥を行う。

8、収穫…着果後45～50日前後で収穫。

9、病害虫…アブラムシ、オンシツコナジラミ、ハモグリバエ、うどんこ病等が発生する為早めの防除を行う。

畜産



家畜の暑熱対策について



畜産

山下 和彦
下島宮農指導センター
080-1766-6339

暑熱対策の必要性

牛は寒さには強いですが、暑熱には弱い動物です。これからの気温の上昇に合わせて、暑熱の対策に努めましょう。

牛からは代謝熱や呼吸熱などが、糞尿からは湿気とアンモニアが放出されます。特にアンモニア等は呼吸器系の疾病(肺炎等)を招きます。

従って、牛舎内の暑熱対策は牛から発せられる熱の速やかな放散や、アンモニア、湿気、細菌、ちり等を素早く牛舎外へ排出することが大切です。

暑熱対策

1、畜舎環境

①直射日光の遮断…遮光ネットやグリーンカーテンなどを利用し、直射日光から牛を守る。(※通気を妨げないよう注意する。)

②畜舎内の通風換気…送風機や細霧機を活用し、空気の流れを確保することで熱や湿気等を舎外へ放出させる。(※通路だけでなく、牛房内が涼しくなっているか確認する。)牛が寝る時の鼻の高さにしゃがむと案外臭気があるかも…

③畜舎屋根の断熱・冷却…白色塗装(ペンキ、石灰乳)、

断熱材の設置

④衛生害虫の駆除…暑熱に伴い、衛生害虫(ハエ、サシバエ、アブ等)の発生が多くなる。多大なストレスとなるので堆肥出しと合わせて、消毒薬の散布を行う。(BLV対策)(※特に牛房の壁際や隅にハエの卵、ウジが隠れているので入念に散布する。)

2、飼養管理

- ①密飼いを避ける…体熱の上昇を抑える。
- ②牛体への散水…耐熱を効率よく体外へ放出する。
- ③牛体の毛刈り…皮膚からの体熱放出効率の向上。
- ④涼しい時間帯の給餌…採食量を落とさない工夫。
- ⑤豊富な給水量…清潔で十分な水を給与することで、蒸散量を増加させる。
- ⑥飼料の腐敗防止…湿気の高い時期は粗飼料や濃厚飼料が腐敗しやすい為、風通しの良い場所へ保存する。<カビ毒防止>(※腐敗した飼料は、牛に悪影響となるため廃棄する。)

暑熱によるストレスは母牛には受胎率の低下を招き、子牛には発育に大きく影響します。このような点に注意して暑さを乗り切りましょう。

営情

作物・営農・技術情報をお届け

夏バテのビタミン不足に胚芽米

管理栄養士・雑穀料理家●柴田真希

暑い日々が続くと「そうめんやそばなど冷たい麺類に麺つゆだけ」というような食事になりがちです。短時間で作れて、食欲がないときでも食べられる麺類にはつい手が伸びてしまいますが、このような食事を続けていると、タンパク質やビタミン・ミネラルが不足しがちになり、疲れやすくなったり夏バテの原因になったりします。

そんなときにもご飯がお薦めです。「暑くて台所にも立ちたくない」「もつと効率良く栄養を取りたい」。そんな人にお薦めなのが「胚芽米」です。白米より健康に良いことはなんとなくご存じの方もいらっしゃると思いますが、玄米や白米との違いは何なのでしょう。

まず、玄米とはもみ米からもみ殻を除いた精白していないお米のことです。白米に比べて夏バテ時に補給したいビタミンB1は5・1倍、抗酸化作用のあるビタミンEは12・0倍も含まれています。

それに比べて胚芽米（胚芽精米）は、ぬか層のうち胚芽だけを選択的に残して、他を除いた物で胚芽保有率80%以上の物をいいます。白米に比べてビタミンB1は2・9倍、

ビタミンEは9・0倍と玄米には劣りますが、大切なのは消化と吸収です。

食物繊維も豊富な玄米は、不足しがちな栄養が取れるというメリットはありますが、しっかりと消化できるように炊くのに時間がかかったり、お子さんや高齢者、胃腸の弱い方や夏で弱っているときには適さないこともあります。

調理方法や食感が白米に近い胚芽米は、夏でも無理なく栄養が補給できるのです。

夏は汗などでビタミン・ミネラルが不足しがちになります。しっかりと栄養のあるお米で補給していきましょう。



■白米と比べた栄養価

	玄米	胚芽米
ビタミンB1	5.1倍	2.9倍
ビタミンB2	2.0倍	1.5倍
ビタミンE	12.0倍	9.0倍
マグネシウム	4.8倍	2.2倍
食物繊維	6.0倍	2.6倍

※日本食品標準成分表2015年版(七訂)より計算

果樹



7月の柑橘園管理

7月に入りますと梅雨も明けて、夏がやってきます。今後乾燥しやすい園地では肥大や減酸促進させる為、かん水を行います。

また、今年より摘果の重要な時期となります。暑い中の作業となりますが、肥大を良くする為にも早期に摘果作業に取り掛かり高品質果実生産を行います。

1. 病害虫防除

対象品種	防除時期	対象病害虫	農薬名	希釈倍数	備考
中晩柑	上～中旬	黒点病	※1.エムタイプアeer水和剤	600倍	混用散布
		アザミウマ類 ゴマダラカミキリ	モスピランSL液剤	4,000倍	
温州 中晩柑	発生時	ミカンハダニ	パロックフロアブル	2,000倍	
	発生時	ハマキムシ	オリオン水和剤40	1,000倍	
	発生時	カメムシ	スタークル顆粒水 MR.ジョーカー 水和剤	2,000倍	忌避効果もあり

※1.温州にはジマンダイセン(水)600倍を使用してください。

※2.アザミウマ類、ゴマダラカミキリはアドマイヤー(F)4000倍も使用できます。

※3.デコポンの果皮強化対策としてカルシウム剤を7月～9月に散布を行います。

2. 施肥

栽培タイプ	施用時期	品種名	肥料名	10a当たり袋数
省力化タイプ	7月上旬	清見・河内晩柑・甘夏・ パール柑・デコボン	アグリロング 28号	6袋

3. 摘果の実施

○温州みかん・・・小玉果や病害虫果を中心に摘果を行って下さい。また、日焼けしやすい上向き果も摘果を行うようにしましょう。

果樹

鶴浜 研二

上島営農指導センター
080-1771-4257



○中晩柑・・・今月の中旬までに粗摘果を行って下さい。粗摘果では目標着果数の7～8割程度まで落とします。裾成り・内成を最初に、その後赤道部と樹上部の小玉果や傷果を落とすようにしましょう。

品種名	階級目安	7月10日	7月20日	8月1日
デコボン	2L	30ミリ	35ミリ	43ミリ
清見	2L	37ミリ	44ミリ	49ミリ
甘夏	2L	38ミリ	47ミリ	57ミリ
河内晩柑	L	45ミリ	55ミリ	59ミリ
パール柑	2L	57ミリ	67ミリ	75ミリ

4. 温州みかん品質向上対策

○タイバック被覆の実施

品質向上の為に、タイバック被覆を行います。

また、被覆後は定期的に果実分析を行い、品質に応じた水分管理を行います。

品種名	被覆時期	品種名	被覆時期
肥のあかり・豊福・肥のさやか	6月下旬～7月上旬	南柑	7月中旬
肥のあけほの・早生	7月中旬	青島・金峰	8月上旬

○フィガロン散布の実施

マルチ被覆と併せ、フィガロンを散布する事により品質の向上を図ります。下の表を参考に実施しましょう。

1回目の散布時期は満開日より60日後、2回目は満開日より80日後となります。但し、収穫前日数は21日までとなっていますので、使用の際はご注意ください。

※使用薬剤 フィガロン乳剤

品 種	1回目		2回目	
	散布時期	希釈倍数	散布時期	希釈倍数
極早生	7月上旬	2,000倍	7月下旬	2,000～3,000倍
肥のあけほの	7月上旬	2,000倍	7月下旬	2,000～3,000倍
早生	7月中旬	2,000倍	8月上旬	2,000～3,000倍
普通	7月中旬	2,000倍	8月上旬	2,000～3,000倍